

## 罪と罰の定め フィールディングの小説において

能 口 盾 彦

- 1 -

家族の崩壊、家庭教育の貧困が囁かれて久しいが、この問題は社会の混乱や無秩序と無関係ではない。21世紀を目前にして犯罪の一層の低年齢化は世界的な傾向で、いたいけない少年、少女の円らな瞳が社会の鏡と化している。昨今の社会問題を考えると、政と秩序の相克が根幹にあり、社会と個人双方のモラルが厳しく問われている。人間社会にあって、国家間は無論の事、各共同組織相互の軋轢を削ぎ、老若男女の利害対立を除いて共存できる体制を築こうとしてきたが、利害の調整をはかる事は至難の業、現代社会では殊のほか難しい。秩序を保持し得る事は法治国家にとって望ましき事だが、独裁者の手による弾圧政治は避けねばならぬ。独裁者の素振りも見せなかった者が変貌を遂げた例は数多く、始末に負えない。人が法を成し、法の名のもと、国家または公共団体は古来より行政上の義務違反者に対し、制裁として秩序罰を過料として下した。近代国家と異なる牧歌的な社会にあって、法の施行は厳粛に執り行われた。物語の世界にあって同様に、勸善懲悪の理念が脈打ってきた。キリスト教圏にあるなしに関らず、悪人が滅び、善人はいつか救われると人々は信じ、かつそう願ってきた。『鞍馬天狗』や『水戸黄門』、『怪傑ゾロ』に『紅はこべ』や『スーパー・マン』に具現される世界である。悪は滅び、善が必ず勝利するのが必定パターンで、作者は唯一絶対の存在を

占め、まさに独裁者そのものと言っても良い。ヨーロッパでの“悪漢小説”の一時的な席捲の程を考慮に入れねばならぬが、全般的に紋切型で、ストーリーは大岡裁きに要約されるのではないか。極悪人には然るべき刑が下され、温情ある判決は読者の共感を勝ちとるのである。フィールディング(Henry Fielding)の作品が面白く、読者の共感を呼ぶのは勸善懲悪、因果応報の物語性が故であろう。

個が悪いのか、それとも社会全体がその機能を果たさないのか、堂々巡りの出口無き議論の様相を呈するようだが、フィールディングの時代の英国でも社会混乱と無縁ではなかった。当時の人々にとって、とりわけ文筆家には、社会秩序の綻びは無視し難かった。社会風紀の乱れや、ジン等の安価なアルコール飲酒が絡む犯罪は社会問題となり、ホガース(William Hogarth)等に恰好の画題を提供した。<sup>1</sup> 頻繁に起こる凶悪事件に治安の悪化は否定し難く、社会啓蒙を執筆の大きな原動力とするフィールディングにとって由々しき事態であった。18世紀英国にあって、文筆家は自らのペンで社会啓蒙を目指し、自己に科せられた社会的使命と公言してはばかる事はなかった。<sup>2</sup> 彼の文壇の好敵手、リチャードソン(Samuel Richardson)が『パミラ』(*Pamela, or Virtue Rewarded*)に先立ち、書簡の手ほどきとも言える『行為規範書』(*Familiar Letters*)をものしたのも、道徳規範の確立を目指した所産であり、<sup>3</sup> 自己の社会的使命を念頭に置いたことは間違いなからう。フィールディングが下す罪と罰の定めは登場人物の命運に示唆されるのではなからうか。無論、18世紀中葉の英国の犯罪史を典拠とし、現実の法的「罰」とフィールディングの手による「罰」とを混同してはならないが、この論では、フィールディングが罪とする罰を、具体的に彼の小説の中に求め、彼の罪と罰の認識の程を探求したい。

う。伝記作家や研究者の指摘にもある如く、<sup>4</sup> フィールドイングと法曹界の縁は因縁浅からぬものがあった。フィールドイングの母セアラの父ヘンリー (Henry Gould) は高名な裁判官 (Judge of the Queen's Bench) であった。1737年6月に施行された“劇場封鎖令”(The Licensing Act)の結果、劇作家の道を閉ざされたフィールドイングは同年11月にミドル・テンブル (Middle Temple) に入り、短期間で弁護士資格を得るのであった。フィールドイングの弁護士転身を隔世遺伝の成せる業とか、極めてロマンティックな解釈が下されがちだが、手許不如意のフィールドイングが法曹界で活躍中の母方の叔父ダヴィッジ (Davidge Gould) や従兄弟ヘンリー (Henry Gould) の助言を受けた由縁と見るのが妥当であろう。弁護士(barrister)としてのフィールドイングの経歴を見ると、1740年6月にミドル・テンブル所属の弁護団の一員として登録され、1748年10月ウェストミンスター (Westminster) 管区の、さらに1749年4月にはミドルセックス (Middlesex) を管轄する治安判事 (justice of the peace) に任じられている。治安判事としての彼の奮闘振りを物語る刊行物も少なからず数える事が出来る。1751年1月に『近時強盗の激増する原因の調査』(An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers) が出版され、1752年4月に『神の介入で殺人が露見し罰せられた実例』(Examples of the Interposition of Providence in the Detection and Punishment of Murder) が上梓された。そして1753年1月には『貧民に適切な食を与える提言』(A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor) や1753年3月には『エリザベス・カニング事件の真相』(A Clear State of the Case of Elizabeth Canning) が刊行された。晩年は健康の衰え著しく、盲目の異母弟ジョン (John Fielding) に後任を託し、1754年4月に判事職を辞している。

フィールドイングが弁護士稼業に入るも、しばし開店休業同然であったのは、かつて辛辣な政治諷刺で名をはせた辣腕劇作家フィールドイングに弁護を依頼する事は憚られたからであろう。文学史にはリチャードソンの成功がフィールドイングの執筆意欲を鼓舞し、小説家としての転身を促したとされ、

事実その様であった。『パミラ』のパロディー執筆に創作意欲を駆り立てられた結果、『シャミラ』(*Shamela*)や『ジョウゼフ・アンドリュース』(*Joseph Andrews*)執筆へと繋がり、人生の岐路にあったフィールディングの進路を決定づけたのだが、金銭の絡みも無視できない。自らは痛風の発作で弁護士として十分な活躍が出来ない上、家族が増えた事やシャーロット夫人の病等から、フィールディング家の台所は火の車であった事は、伝記作家の伝えるところである。<sup>5</sup> しかしながら、金銭のみがフィールディングに治安判事の職を得させたとするのは短絡的解釈で、純然たる金銭目的であれば、巷の治安判事の狡猾さや司法行政官達をフィールディングが『アミーリア』(*Amelia*)で執拗に批判する事はなかったであろう。<sup>6</sup> 任を得るには政治パンフレットで政府擁護の論陣を張り、『トム・ジョウズ』(*Tom Jones*)に献呈の辞を添えたりトルトン卿(*George Lyttelton*)の口添えも得ねばならなかった。<sup>7</sup> 治安判事職に専心するフィールディングの晩年の姿に、社会改革者としての一面が窺われる。もっとも、体制擁護派に属するフィールディングを純然たる社会改革の旗手と考えるのは早計で、自ずから限界があった。彼の功績の最たるものは後の警察組織となる治安維持班を創設した事であろう。1750年ヘンリー・フィールディングと弟ジョンがロンドンのボウ・ストリート警察を設立、1792年には同様の機構が随所に設立を見、治安判事が警察判事が配属され、署外で働く巡査(*constable*)を指揮した。<sup>8</sup> 18世紀半ばまで、治安維持は夜警に委ねられ、『アミーリア』では夜警の活動実態や、老人が夜の町の巡回に当たる場面が描写されており(19,20,24)、当時のロンドンの治安悪化の状況を読者に彷彿させるに不足は無い。

フィールディングの治安判事振りを伝える事例に、「エリザベス・カニング事件」がある。事件は1753年1月初頭に治安判事フィールディングの所管内で起こった。親戚の家から帰宅途中の乙女がジブシー女一味に誘拐され、一ヶ月になんなんとする監禁の末、娼婦に陥れられそうになるが辛くも脱出し、無事生還したとする猟奇事件である。<sup>9</sup> パミラ幽閉を彷彿させる乙女の

狂言話に世間もフィールドディング自身も翻弄される顛末に、司法を司る者としてのフィールドディングの資質が問われ、そのセンチメンタルなフィールドディングの治安判事振りは彼の限界を示唆するものと言える。フィールドディングの処断は冷徹に徹しきれない彼の性格を反映し、その事は天罰と思しき登場人物の処遇にも指摘出来るのではないか。

- 3 -

フィールドディングの判事振りとは、彼の分身と思しき作者が作品中に下す鉄槌とが如何に関るか、罪と罰の観点に基き、フィールドディングの小説に登場する登場人物の因果応報を例証したい。『トム・ジョウンズ』の巻末で、主人公ジョウンズの異父弟であるプリフィルの悪業の数々が明るみに出、厳罰が相当と考える読者も少なくないだろう。所払いは当然にしても、300ポンド弱の年金が付与され、それを元にロンドンの北200マイルの地で名士としての再生が約束されるのだが、プリフィルの邪悪さに相応しき刑事罰ではなく、彼の行く末が厳しく問われて然る可しではなからうか。ジョウンズのフォイル・キャラクターであるプリフィルは邪な言動に終始し、幼き頃より大人に取り入っては、ジョウンズを陥れようとする。ライバル心からジョウンズの恋路の邪魔をし、策略を弄して伯父オールワージの財産の独占を狙うプリフィルは、自らの所行が露見して進退極まると、卑屈なまでに許しを請う破廉恥極まりない輩として描かれているから、なおされその印象が強い。

オールワージ家の森番ジョージは越境密猟の科で解雇されるが、貧しい彼の暮らし向きを見兼ねて、ジョウンズは子馬や聖書を処分して援助の手を差し伸べる。この大恩あるジョウンズが紛失したと思われる五百ポンドの銀行券を猫糞してしまう事から、ジョージには“取得物隠匿”の罪が科せられよう。この件に関し、後日オールワージ氏がジョージの罪状をダウリング弁護士に尋ねる場面で、弁護士は、“... he thought he (Black George) might be indicted on the Black Act.”<sup>10</sup> と返答する。同法は1723年に交付された「ジョ

ージ世法令第9号22条」に当たり、密猟の罪や財物強要罪を犯すギャングが顔を黒くした事実に由来する。密猟の他に、名前を騙って金を無心する手紙を送付する行為も指すが、猫糞と如何なる関わりがあるか不明である。後ろめたさがブラック・ジョージをして獄中にあるジョウンズを尋ねては資金援助すら申し出るが、事が発覚すると蓄電して行方知れず。

悪質さに於いて、ダウリング弁護士がブリフィルと双壁と申せよう。オールワージ家出入りの悪徳弁護士で、ジョウンズの出生の秘密の鍵を握る人物として描かれ、ブリフィルと共謀する。ジョウンズの決闘に居合わせた目撃者に偽証させようと奔走するダウリング弁護士がナイティンゲール氏に目撃され(XVIII, v) この目撃証言によりオールワージ氏は同弁護士に疑念を抱く。ジョウンズを陥れんとして、ウォーターズ夫人に裁判の告訴費用の立て替えを申し出た事が明らかにされる(XVIII, viii)。同章で数々の策謀が露呈した結果、窮地に陥ったダウリング弁護士はオールワージ氏に同氏の妹ブリジェットの辞世の言葉を伝え、漸くジョウンズの素性が判明する。ジョウンズの出生を不問に付すのも同弁護士の金目当ての保身術である。結局、オールワージ氏から譴責されるが、こうした弁護士の扱いぶりにフィールディングの司法関係者への不信が凝縮されているのではなかろうか。

哲人スクウェアと神学者スワッカムはオールワージ家でジョウンズとブリフィルの教育係を務めるが、空理空論を旨とする凡俗の輩である。彼らの偽善を暴くのが作者の意図で、圧巻は哲人スクウェアとモリーの情事発覚の場面である(V, v)。神学者スワッカムは物事の本質を捉えずして、意に添わぬ生徒には躊躇無く打擲を加える冷酷無比な独善家で、自らの雇用確保に汲汲とするが、巻末では更迭の憂き目を見る。

フィールディングが与える制裁の最たるものは死の宣告である。陳腐なパターンだが、さり気ない死の報告がゆえ、一層作者の意図が窺えると言うもの。哲人スクウェアは悔悟の文をオールワージ氏に書き送った後に亡くなる。キャプテン・ブリフィルは卒中であえ無い最後を遂げ、彼の妻ブリジェット

は痛風の発作であっけなく客死する。『アミーリア』に登場する悪徳弁護士マーフィはアミーリアの母ミセス・ハリスの遺言書作成の立会人の一人（他の二人はロビンソンとカーターで、それぞれ二百ポンドの礼金をせしめる）で、遺言書書き換えの労で過大な報酬を得るが、遂には悪事が発覚し、“文書偽造罪” (forgery)の科でニューゲイト送りとなり、タイバーンで絞首刑に処せられる。遺言検認の問題を扱うのは、当時にとっては離婚問題同様、教会裁判所の管轄であったと考えられる。同弁護士の依頼人であるアミーリアの妹は遺産横領が発覚し、逃亡するが捕捉される。遺産は全て正当な相続人、アミーリアの手許に戻る。ミス・ハリスは“横領罪”だがアミーリアの取りなしで厳罰を免れ、仏国に渡るも恵まれぬまま客死する。いずれの死も実に素っ気無き言及に終始するのも、因果応報、天罰の意趣が込められているからなのではないか。フィールドディングが誅罰を加えるには、“罪を憎んで人を憎まず”の信条に立脚すると言つて的外れではなかろう。天刑に伴う蓋然性はともかく、プロットの展開から当の人物の必要性が消滅するや、死の宣告が下される。死因が何であるかはここでは問題とはならず、状況設定に意味がある。プリジェットの客死は物語の展開と密接に絡まり、パラダイス・ホールでの臨終では意味を成さず、彼女の辞世の句がオールワージ氏の知るころとなれば、ジョウンズの処遇に変化は避けられない。道中談は存在せず、ダウリング弁護士やプリフィル等の謀略が瓦解する面白さに欠けることとなり、悪党の画策を画餅に帰そうとする作者の間尺に合わぬ。

死後の世界を扱う『あの世への旅』 (*Journey from this World to the Next*)は、フィールドディングの作品にあって特異な位置を占める。1741年12月1日に生を終えた本編の語り手の肉体から靈魂が抜け出で、黄泉の国へ旅立つとする紀行物語である。語り手である<私>は靈魂達と集ってロンドンを後に、乗り合い馬車に揺られ、「死の館」を経て大河をボートで渡り、徒歩で漸くミノスが守る極楽浄土(Elysium)の門へと辿り着く。ミノスが靈魂達に下す裁決には3通りある。極楽浄土入りを許すか、冥界下の深淵(Tartarus)へ突き落と

すか、或いはもと来た道へ押し戻すかである。ミノスの裁決基準は慈悲心と善意に則り、フィールディングの治安判事振りの縁ともなろうが、ミノスの裁決には気紛れや偏執さも指摘される。前世の罪深き罪人が深淵へ落ちるのは当然にしても、美術品愛好家や身持ちが固く美しい乙女に加え、愛国者や指揮官達が逆戻りさせられる。私生児をもうけた科で息子の相続権を抹消した実直な男や威厳ありげな公爵、病院に寄付をした亡者の極楽浄土入りは阻まれるが、先のロンドン市長(Humphrey Parsons)<sup>11</sup>には忽ち開門が成ると言った塩梅である。

“姦通罪”もフィールディングがしばしば取り上げる科である。<sup>12</sup> アミーリアやハートフリー夫人は貞操の危機に際しても上手く窮地を脱するが、ミセス・ベネットは毒牙の餌食となる。一方、姦通のテーマをコミカルに脚色したのが『シャミラ』である。シャミラはブービー氏を焚き付けては玉の輿に乗り、贅沢三昧の日々を過ごし、夫を蔑ろにしてはウィリアムズ牧師と旧交を温めるに暇なし。だが遂には全て夫の把握するところとなり、“姦通罪”の科でシャミラは放逐処分を受ける。破戒僧ウィリアムズの姦計も明るみとなり、ブービー氏の差し金で聖職禄を奪われ、宗教裁判所に訴えられる。愚鈍なブービー氏との設定と同氏の迅速かつ的確な対応に、一貫性を欠くとの指摘もあろうが、ブービー氏の役割は応報者(rewarder)なのである。『パミラ』のパロディとしての『シャミラ』では、罪と罰の応報者、裁定者が効果的に連鎖される定めにある。

“不義密通の罪”の項目で、ジョウンズはともかく、アミーリアの夫ブースは不貞行為の責を負わねばならぬが、パートリッジは妻の邪推から、冤罪で村から追われる。ジョウンズと再会して共にロンドンを目指すパートリッジではあるが、ジブシー女と係って彼女の夫から訴えられ、ジブシーの長の公平無私な裁決で救われる(XII, xii)。一般的に野蛮、野卑と蔑視されがちな集団にあって、公正な判決が下される事実が物語ることは、当時の英国法の実態、法律関係者に対する痛烈な皮肉と捉えるべきであろう。

贓物引受人ワイルドは雄弁術も兼ね備える知能犯である。贓物買い付けは犯罪行為であるが、<sup>13</sup> 自らは手を下さずして部下を犯行に仕向ける遠謀深慮の程にワイルドの大物振りが発揮され、偉大さの権化として描出されている。対するハートフリーは善良さを絵にした如く、猜疑心とは無縁な人物として描かれている。ワイルドはこの友を言葉巧みに欺いては宝石を騙しとり、彼の妻を誘拐して蛮行に臨むが未遂に終わる。如何なる窮地にあっても、自己の才覚で危機を脱するワイルドではあったが、上手の手から水が漏れたの如く、密告されて投獄の憂き目を見る。監獄にあっても彼の处世術は他に擡んでるのだが、仲間の裏切りから刑場の露と消える。史実に則り、ワイルドの冷酷無比な部下の操縦法に、先の宰相ウォルポール(Robert Walpole)の偉大さが拮据される。<sup>14</sup> ところが一方、妻リティシア・スナップにはまったく頭が上がらぬワイルドの描写にフィールドイングの創作性が発揮される。

他にも諸々の微罪、数々の被疑者の例を見る。『トム・ジョウンズ』に登場するパトリッジは村から放逐された後、某所で飼育中の豚が他人の庭園を荒らした科で、7年もの間ウィンチェスターの牢に投獄の憂き目を見る(XVIII, vi)。ロンドンへの途上、ジョウンズ共々ピストル強盗に遭遇し、後に犯人がミラー夫人の従弟と判明する落ちがあるが、主人公の寛大な扱いとは裏腹に、当時の追い剥ぎ、強盗の輩に対し、一罰百戒の意味から極刑が当たり前であった。さらに同物語り結末部で、ジョウンズがフィッツパトリック氏との決闘で、相手を負傷させた廉で投獄される(XVI, x)。目撃証言をめぐってダウリング弁護士が暗躍するのだが(XVII, ix)、先に剣を抜いたか否かの正当防衛論争で一件落着する。『アミーリア』でブースの不倫相手、昔なじみのミス・マシューズは女丈夫とは言え、内縁の夫をナイフで刺殺した殺人罪でニューゲイトに投獄される。そこへ夜陰の喧嘩騒ぎの仲裁に入り、夜警の角灯破損、器物損壊罪でブースは連行される。官憲に心づけ(半クラウン)をブースが手渡せれば、窮地を脱することも出来たのだが、微罪でもニューゲイト送りとなるのである。当時の監獄の有り様はシュオルツ

(Richard Schwartz)が指摘する如く、<sup>15</sup> 微罪、重罪、男女の別なく同一箇所収容された事実は『アミーリア』からもよく分かる。『ジョウゼフ・アンドリュース』での幼児誘拐罪、人さらいの介在は伝統的な物語技法だが、登場人物の人間関係を構築する上では重要な設定で、出生判明の手段として登用されていることから罰則規定の枠外に置かれる。『アミーリア』での法律関係者の言及が同作品の大きな特徴であるが、ブースが債務未済で執達吏(bailiff)の手により債務者拘置所(sponging house)に収監される。<sup>16</sup> 負債の為の投獄は1869年まで廃止されなかったことは意外だが、この事は如何に英国民が負債問題を重視していたかの証しとなる。

- 4 -

ジョウンズとプリフィルに代表される宿命のライバルの処遇を巡っては、作者フィールディングは、“汝の隣人を愛せ”や“汝の敵を愛せ”とする理念に根ざしているようである。処刑して余りある咎人に対し、暴にたいし恩で報いんとする教えは宗教の枠にはまらぬ人間愛そのものであろう。ただし現実には万人が行い易き所業ではない。太古の昔から人類は共存しつつも互いに競い合ってきた。特に隣人同志は利害が交錯するのが常、故にこれに類する標語が宗教家や教育者の口の端に上ったのであろう。隣人との揉め事は避け難く、これに類する標語は人類の営みにより帰納的に生まれた実状の裏返しと考えられる。ジョウンズが悪行の限りを尽くしたプリフィルの罪を許し、財産の一部を割譲する件に、読者は主人公の寛大さを改めて実感し、心洗われる思いに満たされるのである。作者はジョウンズに、貧しさに毒されず、打ち続く虐待にも陽気さを失わず、健全で健やかな人格形成を図るのである。本来、ジョウンズには他より毒されぬ素地があると言い換えた方が良くも知れない。保身を旨とする上流階級の人是一片の博愛精神にも事欠くが、金銭的余裕がある彼らにこそ、寛容さや憐憫の情が溢れて然るべしとするのがフィールディング流解釈であろう。現実はさにあらず。その端的な例

がジョウゼフの救出場面に象徴される。ロンドンから故郷への旅の途中で強盗に出会い、負傷させられた挙げ句、身包み剥がれたジョウゼフに手を貸すのは、馬車に乗り合わせた紳士淑女達でなく、御者(postillion)の若者である( I, xii)。類例に、アダムズ一行がトラリパー牧師に路銀の借用を断られ、旅籠の支払いにも窮するが、居合わせた貧しい行商人が弁済の労をとる箇所がある( II, xv)。いずれも、人間の地位・身分、貴賤の有無に疑問が呈せられ、おつに澄ました婦人( Mrs.Grave-airs )の気取りや事勿れ主義の男性の偽善が暴かれる。

『ジョウゼフ・アンドリュース』の原著者による序文に、真の滑稽さの唯一の根源は気取りにあり、気取りは虚栄と偽善に起因するとある。人の内面と外面の矛盾にフィールドイングが鋭くメスを入れるのも、『トム・ジョウズ』第一巻第一章で作家とは“定食屋の親爺”の如く、万人の味覚を満足すべく、人間性の料理を読者に供すると陳述する由縁である。男女の差違、職種の尊卑、老若の区分に個々の人間性が影響を受ける事は無い、との作者の信念の現れともとれる。同書第十巻第一章にあつて、作者曰く、

. . . as for Instance, between the Landlady who appears in the Seventh Book, and her in the Ninth. Thou art to know, Friend, that there are certain Characteristics, in which most Individuals of every Profession and Occupation agree. To be able to preserve these Characteristics, and at the same Time to diversify their Operations, is one Talent of a good Writer.(525)

であると。さらに人間性の善し悪しについて、作者は、“ In the next Place, we must admonish thee, my worthy Friend, (for, perhaps, thy Heart may be better than thy Head) not to condemn a Character as a bad one, because it is not perfectly a good one.” (526)と、完璧なまでの善人の存在を否定する。モリーとの情事は、主人公ジョウズの若気の至りと称されなくもないが、前述のプリフィルの奸智や狡猾な立ち回り、悪事の露見後の卑屈な振る舞いを考えると、彼こそ絶対悪と異を唱えたくもなる。絶対的な悪人はこの世に存在しないとす

る考えは、なにもフィールディングの独創にあるのではなく、当代の多くの文人共有の認識と申せよう。元々、アリストテレスの『詩学』には、完全無欠な善人は無論の事、悪人の描写は性格描写に迫真性や作品の持つモラル効果を低下させるため、避けるが肝要とある(XIII,v)。この原理はフィールディングの時代にも踏襲され、ドライデン(John Dryden)やアディソン(James Addison)は言うに及ばず、デニス(John Dennis)にギルドン(Charles Gildon)やブルーム(William Broome)と言った文人の名が挙がる。アン女王の侍医で著述家のブラックモア卿(Sir Richard Blackmore)は完全無欠な人間は人を驚かすのみと説き、当代きっての説教者として有名なパロウ(Isaac Barrow)や倫理学者のシャフツベリー卿(Cooper, Anthony Ashley, third Earl of Shaftesbury)も同様の主張を展開している。<sup>17</sup>

- 5 -

フィールディングが描く職種は数多く、旅籠の旦那や内儀に女中、行商人や乗合馬車の御者から本屋や収税士に執達吏、医者や牧師、執事や女中頭、地主や貴族から有閑マダムまでと社会各層に跨る。とりわけ牧師の姿は際立ち、作品の随所に現れる。トラリバー牧師の如き金銭欲に駆られた在野の聖職者の姿に、“困い込み運動”に専心して利殖に血眼となった18世紀当時の英国の教会関係者の姿が写される。フィールディングの聖職者批判へはこれまでも言及した事から、<sup>18</sup> 法律関係者に対するフィールディングの筆致を論及したい。歴史を紐解けば、英国は普通法(common law)と衡平法(equity)に教会法(church lawまたはcannon law)という3種類の法律で治められてきた。史実に則して実態調査に当たるより、本章では司法の一翼を担った治安判事や弁護士役割や区分を、フィールディングの小説上に指摘するに止めたい。

本論3章でプリフィルの黒子役、ダウリング弁護士の存在を指摘したが、彼には主人公の出生の秘密を握るキーマンとして重要な役割が担われている。

. . .Mr. Dowling, the Attorney, who was now become a great Favourite with Mr. Blifil, and whom Mr. Allworthy, at the Desire of his Nephew, had made his Steward, and had likewise recommended him to Mr. Western, from whom the Attorney received a Promise of being promoted to the same Office upon the first Vacancy. . .(900)

ブリフィルに取り入っては同弁護士はオールワージー家で確固たる地位を占めるに至る。全編で極く僅かしか姿を現さないが、ジョウズと旅の途中で遭遇する等、節目節目に登場し、物語の展開には欠かせない人物である。権力の推移に敏感なダウリング弁護士の処世術は、まさに悪徳弁護士のそれである。時流に即応する俊敏さは同弁護士らしく、形勢不利と見るや、洗いざらい告白しては保身に努める。変わり身の速さが彼の信条で、オールワージー氏に赦免を請い許される。

ジョウゼフが強盗に遭い、助けを求めた乗り合い馬車の乗客にも、弁護士 (lawyer)の姿を見る。やり過ぎそうとする乗客一行に、博愛精神を微塵も感じぬ冷静さで、彼はこう語るのである。

. . .A young Man, who belonged to the Law answered, 'he wished they had past by without taking any Notice: But that now they might be proved to have been *last in his Company*; if he should die, they might be called to some account for his Murther. He therefore thought it adviseable to save the poor Creature's Life, for their own sakes, if possible; at least, if he died, to prevent the Jury's finding *that they fled for it*.<sup>19</sup>

慈愛の精神を欠く弁護士の言葉に、冷徹な勘定高さ、と同時に当世流の処世術が指摘される。当時の罰則では、死刑相当の犯罪現場を素通りする者は、たとえ犯罪責任を免除される場合でも、逃避行為は全ての動産没収に相当する犯罪行為と定められていた。<sup>20</sup> 昔も今も、事勿れ主義が横行するが、人間の弱さと表裏一体を成すものではなからうか。保身に長けた弁護士の言動には、法律用語に通じた打算的な司法関係者の姿が投影されている。“lawyer”

として『アミーリア』に登場するマーフィ弁護士が存在も忘れてはならず、悪行に荷担した張本人として最後には正体が暴かれる。

次に治安判事の例を見てみよう。『ジョウゼフ・アンドリューズ』で暴漢に襲われたファニー救出騒ぎから、濡れ衣を着せられたアダムズ牧師は強盗の科でその地方の治安判事の前に引き立てられる。諧謔性を高めるために誇張されたきらいがあるが、十分な取り調べも無いまま、巡回裁判にかけようとする判事の拙速さ、泥棒捕捉の報奨金の分け前をめぐる村人の争いに(145)、当時の裁判制度の実態を垣間見る思いがする。故郷への道すがら、こうした受難を経て、アダムズ一行が帰郷すると、ジョウゼフに横恋慕するも、望み無きを知ったブービー夫人は法を盾に、若き二人を邪魔立てする。未亡人ながら村落共同体の有力者としての影響力を駆使する訳である。彼女は偽弁護士スカウトを介して治安判事フロリックにジョウゼフ等に村の定住許可を与えぬよう画策するのも、治安判事には浮浪者抑制の実権として、「貧民法」の施行が委ねられていたからである。<sup>21</sup> ブービー夫人の意をうけた弁護士等に関し、フィールディングと思しき語り手は、

This *Scout* was one of those Fellows, who without any Knowledge of the Law, or being bred to it, take upon them, in defiance of an Act of Parliament, to act as Lawyers in the Country, and are called so. They are the Pests of Society, and a Scandal to a Profession, to which indeed they do not belong ; and which owes to such kind of Rascallions the Ill-will which weak Persons bear towards it.(286)

と言及することで、巷に横行する悪徳似非弁護士が存在が読者に知らされる。

当時の治安判事職に如何なる人物が任じられたか、興味は尽きない。通常、治安判事(magistrateと呼ばれる場合もある)は上流階級(gentry)の中から選出され、大地主(squire)や聖職者であることが多かった。その任務は治安維持や、軽犯罪の略式裁判を行ったり、年間少なくとも4回、四季裁判(quarter session)を開催し、他の治安判事共々、地方審理で済ませ得る犯罪を裁いた。

無論、フィクションと現実を結び付ける愚かさは避けねばならないが、興味深い一節が『トム・ジョウンズ』にある。同書の結末部でのウェスタン氏の言葉はその意味で見落とせない。真実を悟ったオールワージ氏は、ウェスタン父娘にジョウンズの素姓を明かして以後の手はずを語る。会見後、

At Mr. *Allworthy's* Departure, *Western* promised to follow his Advice in his Behaviour to *Sophia*, saying, 'I don't know how 'tis, but d-n me, *Allworthy*, if you don't make me always do just as you please, and yet I have as good an Estate as you, and am in the Commission of the Peace as well as yourself.(958)

と、ウェスタン氏は同郷の名士としての自負心を覗かせる。二人の言葉のやり取りは、名主の単なる思慮分別の有無に止まらない。地所に見合った地主階級が“the Commission of the Peace”を受ける経緯が明らかとなり、<sup>22</sup> 治安判事職が二人に委託されている事実が判明する。地所に見合った名誉職、世襲職と目される治安判事の任に、粗忽で独断専行、思慮に欠けるウェスタン氏が適任でない事は申すまでもない。実際、ウェスタン氏の妹は兄の無頼漢振りを咎めている(XV, vi)。ではオールワージ氏はどうか。彼とて治安判事の器であるか疑わしいと言わざるを得ない。先ずもって、人の言葉を鵜呑みにするオールワージ氏の無警戒さ、認識の甘さがその任に似つかわしいとは申せまい。偏執さや世情の疎さがまた問題で、判事として頂けない。妹ブリジットの遺書をめぐり、ダウリング弁護士の処置を詰問するオールワージ氏ではあるが、何故真実を自分に告げなかったのかとの問いに、同弁護士は遺書を委ねたブリフィル氏の言葉を信じればこそ、オールワージ家の家令(steward)として、妹の不祥事を戸主が不問にする意と解したのだと返答する(949)。上流階級の習い、世間体を逆手にとって自己の保身を図る弁護士ダウリングの狡猾さと比べ、オールワージ氏の単純さは社会常識の欠落と捉えるべきではないか。職業柄当然かもしれぬが、ダウリング弁護士の方が遙かに世事・世情に通じている。その名が示唆する善良さが無知蒙昧さの弁証

とはなり得ず、オールワージ氏如き世間知らずの田舎紳士に治安判事職が勤まるか、甚だ疑問と言えよう。

治安判事フィールドイングの経験が作品の随所に見受けられるのは至極当然だが、英国国民の訴訟好きな一面を物語る滑稽な場面が挿入されている。治安判事の関与の観点からも意義深い。『ジョナサン・ワイルド伝』第一巻第十二章で、賭博で手にした有り金をバグショットに強奪された伯爵が、犯人と再会して正体を見破り、“...he (the Count) then proceeded to inform him (Wild), he was very well convinced that *Bagshot* was the Person who robbed him. . . I will apply to a Justice of Peace.”<sup>23</sup>と息巻く場面がある。泡銭を奪われた者が法に訴える理不尽さに諧謔性が込められる個所である。この箇所は英国人の裁判好き、治安判事が占める社会的位置を象徴的に物語るのではなかろうか。

現在、英国では弁護士としての職種は“barrister”と“solicitor”とに大別される。一般に前者は法廷弁護士と称され、上位裁判所における弁護権を独占している。一方、後者は事務弁護士と呼ばれ、訴訟依頼人と前者、即ちバリスターに介在し、裁判事務を扱う。スコットランドでは“advocate”がバリスターに相当する弁護士、及び(1857年までの)イングランドの教会裁判所または海事裁判所の弁護士のうち、コモン・ローの廷吏(*serjeant/sergeant*)に対応する地位にあった者を指す。さらに“proctor”と呼ばれる教会裁判所や海事裁判所での事務弁護人(ソリシター)に相当する弁護士が存在する。

本章で最初に扱ったダウリング弁護士はオールワージ家で家令(*steward*)(900)を務める傍ら、法律事務を扱い、本文では“attorney”(900)とある。現在、米国で“attorney general”と言え、連邦政府の司法長官、各州の検事長官をさす。フィールドイングの時代で検事を指す場合もあったが、下位弁護士に相当したと考えられる。英国のコモン・ロー裁判所で当事者の代理人を務め、12世紀に*responsallis*と呼ばれたが、13世紀になるとattorneyと呼ばれるようになった。14世紀には*serjeant, barrister, attorney*という職務階層の成立を見たが、16世紀後半にattorneyはInns of Courtから外され、barristerとは

独立した法曹グループを形成し、solicitorやproctorと一体感を強めていった。

次例として、『ジョウゼフ・アンドリュース』の乗り合い馬車に、弁護士 (lawyer) が乗り合わせる。元々 “lawyer” とはattorneyやbarristerにsolicitorやcounselorとかadvocate等の総称である。厳密な意味では、英国ではバリスターやソリシターの資格を与えられた者を指す。原文では “A young man, who belonged to the law” (52) とあり、法律通な事と併せ、弁護士が適訳と思われる。同作品結末部でブービー夫人による謀計のお先棒を担いだスカウト氏はまさに偽弁護士(pettifogger)である。原文では法律の知識も無ければ教育も受けず、法令の網をくぐっては地方で弁護士の如くに振る舞い、またそう呼ばれているとある。スカウト氏の如き三百代言は決して少なからず、と申すのも1729年に施行された「ジョージ二世法令第2号23条」には、正式に資格を得ずして弁護士行為をなす者は罰金五十ポンドに処されるべし、とある。<sup>24</sup> 罰金額もさることながら、この様な法令が施行された事実こそ、市井に偽弁護士がいかに横行していたかの証左ではないか。

次に治安判事を考えてみたい。オールワージ氏やウェスタン氏はサマセット州の一地区を管轄する治安判事で、名主としての名誉職としての意味合いが強い。ブービー夫人が似非弁護士スカウト氏を介して治安判事フロリック氏に働きかけるのは定住許可の任免であることから、浮浪者を排して村落の治安維持に努める事が治安判事の職責の一つと考えられた。今日の社会福祉政策の実施に当たって、その根本的理念とは、中世の名残をとどめるキリスト教的家父長制度から生じた思想が「救貧法」を生み出したのである。社会にあって上の者、力ある者が下の者、弱者を助けるのはキリスト教徒として当然の行為であり、現世の博愛行為は来世で神のお褒めを頂けるとする素朴な思考、思想に則っている。<sup>25</sup> 無論、裁判で判事の職務を務める事も大切な役割で、強盗事件に巻き込まれたアダムズ牧師を裁くのは治安判事である。

They were now arrived at the Justice's House, and sent one of his Servants in to acquaint his Worship, that they had taken two Robbers, and brought

them before him. The Justice, who was just returned from a Fox-Chace, and had not yet finished his Dinner, ordered them to carry the Prisoners into the Stable . . . (145)

文中の治安判事はまさにウェスタン氏の分身如き人物である。地方の名士然とした暮らし振りの治安判事は漸く食事を終え、アダムズ等を前にして、傍らの書記(Clerk)に供述書(Deposition)作成を命じ、“ ‘ that Robberies on the Highway were now grown so frequent, that People could not sleep safely in their Beds, and assured them they both should be made Examples of at the ensuing Assizes. ’ ” (145)と即決する。治安判事が命じる“ Assize ”とは1971年に改正されて民事は高等法院(High Court)に、刑事は刑事裁判所(Crown Court)がとって代わったが、イングランドやウェールズの各州で執り行われてきた民事及び刑事事件を扱う巡回裁判を意味し、上級裁判所の判事が定期的に、年間少なくとも四回、地方を巡回する陪審裁判を指す。従って、地方の治安判事はその前段階の司法権が委ねられ、一種の警察権を兼ね備え、地方自治の根幹を担っていたことが判明する。一方、ロンドンの実態はどのようであったか。『ジョナサン・ワイルド伝』第一巻第十二章で、バグショットの正体を見破った伯爵が治安判事に訴えるとまくし立てるが、スコットランド・ヤード(ロンドン警視庁、特にその犯罪捜査部門の別称、スコットランド王の宮殿跡に所在したことに由来する)無き当時であって、金品を奪われた者が訴え出るのは先ず治安判事なのである。ここにも司法と行政に関与する治安判事の姿があり、上記の供述書が意味を持つ事となる。

治安判事が事件と如何に関るのか、フィールディングの小説ではないが、本論二章でふれた「エリザベス・カニング事件」へのフィールディングの関与を伝える一節があり、裁判手続きを知る上でも興味深いので、以下に記す。

Accordingly, upon the 6th of February, as I was sitting in my Room, Counsellor Maden being then with me, my Clerk delivered me a Case, which was thus, as I remember, indorsed at the Top, *The Case of Elizabeth*

Canning for Mr. Fielding's *Opinion*, and at the Bottom, *Solt*, Solr. . . (297)

事件は一審でカニングの主張が認められたが、再審請求が時のロンドン市長によって成され、同僚の“偽証”(perjury)との結審に至った。フィールドイングと同席するマデン氏の肩書きは“counsellor”とあり、アイルランドでは顧問弁護士をさすが、ここでは通常の弁護士と考えられる。カニングの申し立てに対するフィールドイングの意見が上段に、ソルト氏の意見が下段に書き入れられたとあり、“Solr.”からソルト氏が事務弁護士である事が判明する。フィールドイングが同事件に関与するに大きな働きを成したのはソルト弁護士であり、フィールドイングが不承不承、委託を受けた様子が偲ばれる。二人の訴訟委任を巡るやり取りから、フィールドイングの時代では、事務弁護士の依頼を受けて、訴訟手続きの中で必要な法廷弁護を行う法廷弁護人の職務が推定される。

- 6 -

近年、犯罪の若年化は世界的傾向で、我国に於いても少年法の扱いが論議を呼んでいる。刑罰と絡めて改正の動きがあるが、フィールドイングの時代の刑罰は現代とは比べ物にならないほど厳しかったと言わざるを得ない。強盗、窃盗、詐欺行為を働いた犯罪者に対し、裁判手続きも無きが如く、簡単に死刑判決が下された。<sup>26</sup> 死刑執行には様々な用具や装置が用いられて凄惨を極めた。一罰百戒の意味から、公開処刑も度々執り行われたらしく、かのワイルドも1725年にタイバーンで絞首刑に処せられている。公開処刑の対象が政治犯から姦通者に及んだため、社会の関心を大いに呼んだ事は想像に難くない。『テス』の構想の契機は、ハーディ(Thomas Hardy)が目撃した公開処刑であった事が良く知られている。<sup>27</sup> 公開処刑と並んで大いに社会的関心と呼んだのが巡回裁判であろう。<sup>28</sup> 巡回裁判をめぐるのは、モンマス公(James Scott Monmouth, Duke of Monmouth)の反乱に荷担した者への過酷な裁きが有名で、デフォーも危うく一命を失うところであったと言う。ジェフリ

ーズ(George Jeffreys)による巡回裁判の蛮行(Bloody Assizes)は深く歴史に刻まれている。

罪と罰の兼ね合いは懲罰の正当性によって判断されよう。『あの世への旅』で、ミノスに裁かれる貧者が18ペンスを盗んだ科で絞首刑に処せられたとある様に、フィールディングの時代では一片の情状酌量の余地がはかられる事無く、微罪にも重罰が科せられた。フィールディングは*The Covent-Garden Journal* (8 Feb.1752)の中で財産権を定義するに際し、『新約聖書』「ルカによる福音書」6章20節(Blessed are ye poor; for yours is the kingdom of God.)を引き、富裕者と窮乏者はこの世で対等と説く。しかしながら、金持ちが喜捨の気持ちも食する意も無いパン一斤を貧しき隣人が、貧しさ故に窃盗しても許容された古代ローマ社会を肯定している訳ではない。ロビンフッドの如き義賊を彼は決して容認し得ず、英国の現法を改善するため、社会動乱の種となる貧者の為の良き処遇、貧者の解消策を模索する。<sup>29</sup> この辺りの施策は本論第二章で挙げた『近時強盗の激増する原因の調査』や『貧民に適切な職を与える提言』に詳述されている。『コヴェント・ガーデン』紙の行間に、スウィフトの『慎み深き提言』(*A Modest Proposal*)のおぞましさに驚愕するフィールディングの姿を窺い知ることが出来る。されど、如何に貧民の増加を抑制するかしか浮かばずと言った印象から免れず、マルサスの『人口論』の主張を読者に思い起こさせる事であろう。従って、キリスト教の基本理念から逸脱しないまでも、個人の無制限な権利取得は制限されるべし、とするのが治安判事フィールディングの姿勢と解釈しても間違いなからう。

ミノスの気まぐれな裁定は論外だが、フィールディングの小説にあって、勧善懲悪の世界を具現するには悪人共の必滅が定めである。悪に荷担する法律関係者として、弁護士が作品の随所で職種に準じた呼称で例証され、ソリシター等々の職名に限定されない点に、法曹界全般の腐敗構造をフィールディングは指摘したかったのであろう。法の厳格な適用、施行を任されている司法関係者、法曹界の腐敗が故に、裁きは公平に実践されず、絵空事と化し

てしまうことは、フィールディングにとって耐え難きことであった。フィールディングの描く世界にあって、諸悪の権化として悪党が描出され、因果応報の処断が下される。プリフィルを始めとする敵役は死の鉄槌、物質的損失や地位・身分の喪失に甘んじなければならない。だが処罰の内訳を吟味すると、厳罰、極刑が下された例は希で、おしなべて寛大な処置が用意されているのも事実である。悪党一代記の性格上、主人公ワイルドが刑場の露と化すことは致し方ないが、プリフィルやダウリング弁護士の処遇、有閑マダム、ベラストン夫人やブービー夫人、業突張りのトラリバー牧師達には更なる試練が用意されてしかるべしとの読後感が無くもない。この事をフィールディングの甘さと決めつけてはなるまい。フィールディングの寛大さとする向きもあるが、むしろ作者フィールディングの宗教心、特に「聖書」に説かれた愛 (Christian charity) を自らの信賞必罰に反映させようとしたのではないか。天国と地獄の差違はミノスの裁定には似つかわしいが、万事には通じがたい。宿命のライバルの末路が描き難いのもこれまた事実である。現世での報いとなると、敗者を鞭打つばかりでは、勝者の汚点とも写る。汝の敵云々のテーゼは人間存在に関する根源的命題として、筆舌に尽くし難いが、フィールディングの作品に見られる罪と罰の定めは、読者啓蒙を念頭に入れた、明解な曼荼羅模様と化して描出されている。

## 注

- 1 *Gin Lane* や *Beer Street* に *A Harlot's Progress* や *The Rake's Progress* 等の絵や版画に、当時の社会風俗や治安の様子がしのばれる。  
cf. Derek Jarrett, *England in the Age of Hogarth* (London: Hart-Davis, MacGibbon, 1974), 69, 71, 94, 187-92.
- 2 フィールディングが編集した *The Jacobite Journal* や *The True Patriot* 等はハノウヴァー王朝支持者であるフィールディングの政治姿勢を物語る。スティール (Richard Steele) やアディソン (Joseph Addison) のジャーナリズムへの着目、デフォエ (Daniel Defoe) のモンマス公への支持と反乱軍参加、スウィフト (Jonathan Swift)

の政治的野望と蹉跎等に象徴されるのではないか。

cf. Peter Earle, *The World of Defoe* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1976), 6.

- 3 Austin Dobson, *Samuel Richardson* (London: Macmillan & Co. Ltd., 1902), 19-25; Clara Thomson, *Samuel Richardson* (Folcroft, Pennsylvania: The Folcroft Press, Inc., 1969), 24-5.
- 4 Martin Battestin, *Henry Fielding: A Life* (New York: Routledge, 1989), 6-7; 朱牟田夏雄、『フィールディング』(東京: 研究社出版、昭和55年〔1980〕), 4.
- 5 Homes Dudden, *Henry Fielding; His Life, Works, and Times* (Oxford: Clarendon Press, 1952), 244-6; Wilbur L. Cross, *The History of Henry Fielding* (New York: Russell & Russell, 1963), 1: 351, 373, 375-6.
- 6 Henry Fielding, “Amelia,” *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*, ed. Martin Battestin (Oxford: Clarendon Press, 1983), 21. 以下、頁数は全て同版により文中に記す。(cf. Battestin, *Henry Fielding*, 497-8.)
- 7 Dudden, 574-5; Cross, 2: 242-3.
- 8 Battestin, *Henry Fielding*, 578.
- 9 Henry Fielding, “A Clear State of the Case of Elizabeth Canning,” *An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers and Related Writings*, ed. Malvin Zirker (Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ. Press, 1988), 299-301. 以下、頁数は全て同版により文中に記す。
- 10 Henry Fielding, “The History of Tom Jones,” *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*, ed. Fredson Bowers (Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ. Press, 1975), 922. 以下、頁数は全て同版により文中に記す。
- 11 Dudden, 444.
- 12 See Beth Swan, *Fictions of Law: An Investigation of the Law in Eighteenth-Century English Fiction* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1997), 126-130.
- 13 贓物罪の一つ、“贓物牙保罪”が適応されるのも日常的であったらしく、娘ソファリアのマフをジョウンズが手にしているのを見とがめたウェスタン氏は、贓物と知っての事かと、彼を“贓物牙保罪”で治安判事に訴え出ると口走ることからも分かる(X.vii)。
- 14 『ジョナサン・ワイルド伝』が『雑文集』に編入されて1743年4月に出版を見た。1737年6月に交付された劇場封鎖令の由縁は、フィールディングの風刺劇が時のウォルポール内閣をして検閲令発布へと向かわせたのだが、当の宰相は『ジョナサン・ワイルド伝』発刊時には権力の座(二期目は1721-42年)にあらざ、従って、元宰相への風刺効果の観点のみに限定した解釈は当たらない。
- 15 Richard Schwartz, *Daily Life in Johnson's London* (Madison, Wisconsin: The Univ. of

- Wisconsin Press, 1983), 154-61.
- 16 Daniel Pool, *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew* (New York: Simon & Schuster Inc., 1993), 95-100.
- 17 *Tom Jones*, 526, n. 1.
- 18 拙論、「ヘンリー・フィールドイングとメソジスト達」『同志社大学英語英文学研究』35(同志社大学人文学会、1984);拙論、「フィールドイングの宗旨とその背景」『同志社大学英語英文学研究』68(同志社大学人文学会、1997)
- 19 Henry Fielding, "Joseph Andrews," *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*, ed. Martin Battestin (Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ. Press, 1967), 52. 以下、頁数は全て同版により文中に記す。
- 20 cf. *Joseph Andrews*, 52. n.1.
- 21 Schwartz, 166.
- 22 18世紀当時、治安判事として年収百ポンド以上の地所を保有する条件が付帯した。(cf. Roy Porter, *English Society in the Eighteenth Century* [Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books Ltd., 1982], 138.)
- 23 Henry Fielding, "Jonathan Wild," *Miscellanies by Henry Fielding; Volume Three*, ed. Hugh Amory (Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ. Press, 1997), 39. 以下、頁数は全て同版により文中に記す。
- 24 cf. *Joseph Andrews*, 286. n. 2.
- 25 小池滋、『もう一つのイギリス史』(東京:中央公論社、平成3年〔1991〕)、131-3.
- 26 魔女は無論のこと、同性愛者に対しても、厳格に刑の執行が執り行われた。(cf. Schwartz, 146-53.)
- 27 少年時代のハーディ(Thomas Hardy)がドーチェスター監獄で夫殺しの女囚の処刑を目撃し、彼女の身の処し方にテスの描出のヒントを得たと言われている。因みに公開処刑は1868年になって漸く廃止された。(cf. Lady Hester Pinney, "Thomas Hardy and the Birdsmoorgate Murder 1856," *Thomas Hardy: Material for a Study of His Life, Times, and Works*, ed. Stevens Cox [St. Peter Port, Guernsey, C.I.: Toucan Press, 1968], 25:1-7.)
- 28 国王の裁判官が地方に巡回して裁判する制度は13世紀に出来たが、1971年に廃止された。アサイズ陪審がヘンリー二世の時代に制定され、土地訴訟を一種の陪審で審理する裁判方法を定めたことで、陪審員の便宜をはかるため、地方で裁判が執り行われるようになった。
- 29 Henry Fielding, "The Covent-Garden Journal," *The Covent-Garden Journal and A Plan of the Universal Register-Office*, ed. Bertrand Goldgar (Middletown, Connecticut:

Wesleyan Univ. Press, 1988), 80.

## The Regulations of Crime and Punishment in the Novels of Fielding

Key words: fielding, crime, punishment

Tatehiko Noguchi

In view of rendered services to the then government, Henry Pelham's, and of the strong support to the House of Hanover by the journals, *The True Patriot* and *The Jacobite's Journal* Fielding edited in the middle of the 1740s, he was commissioned as justice of the peace for Westminster in 1748 and for Middlesex in 1749. Fielding's political pamphlets as a whole drew up practical solutions to the difficulties confronting society, and "The Universal Register Office" inaugurated by his half-brother John Fielding successfully served the needs of the people in finding not only employment and securing insurance but in the exchange of goods, both stolen and recovered. As magistrate, Fielding established "the Bow Street Runners," which ultimately became the first police force of London. The most sensational case Fielding took as justice of the peace is that of Elizabeth Canning, who claimed to have been kidnapped and imprisoned in a brothel attic for about a month. Some evidence of his handling of the case, insofar as they can be used, supports the presumption that Fielding as well as the public, being obsessed with the fact that Canning's story was exactly the same as that of *Pamela*, took sides with her. She was later convicted of perjury, while Fielding, writing a pamphlet explaining his role, was implicated in the faulty prosecution. Thus, Fielding's subsequent achievement as magistrate so overshadows his words and judgments that he

embodies the credulity of over-trusting judges in *Tom Jones*.

The reason why Fielding is so lenient in his treatment of the evil characters may be that, according to *The Poetics* by Aristotle, the protagonist of a play or epic poem should be a character neither perfectly good nor entirely vicious, so that the author may achieve a greater degree of verisimilitude in characterization and heighten the moral efficacy of the work. As far as good nature or kindness is concerned in addition to wickedness in the novels, Fielding calls our attention to who is kind enough to help the victimized Joseph, stripped of all by robbers on his way home. It is not a lady, Mrs. Grave-airs and a lawyer, but a young postillion of a stage-coach and a servant-maid of an inn who help Joseph by lending him a coat and taking care of him. Compared with people at the bottom of the social scale, people of judicial circles as well as of holy orders are also scathingly criticized, as shown in the case of Mr. Dowling, the attorney in *Tom Jones* and Mr. Scout, the pettifogger in *Joseph Andrews*. Dowling, a vile attorney, being in conspiracy with Blifil who wants to monopolize all inherited property, schemes to hide Jones's paternity. With the help of the evil lawyer Mr. Murphy, Miss Harrison, Amelia's sister, has succeeded in taking possession of all that her mother left. However, she is accused at last of forgery, and punished with banishment. As for the causalities in the case of Blifil or Miss Harriet, both characters should be severely punished, while Fielding mitigates their punishments of deportation, not inflicting the severest punishment provided by the laws of the time.

On the question why Fielding manages to use different official titles of such lawyers as barrister, solicitor, attorney, advocate and proctor, it may be conjectured that, as shown especially in some episodes of *Amelia*, Fielding's perception of the society of his day ruled by judicial circles was

neither in good order nor well managed by corruption and bribery among the bench and bar. The existence of such evil characters as Blifil and Miss Harrison suggest that there were dishonest attorneys and wicked lawyers in the society. The reason why the author has Dowling or Murphy assume the role is that he is convinced that those who should keep the rules for Justice's sake would seek some loophole in conspiracy with their clients. Less severe as his seemingly callous attitude toward the poor appears, it considered in the context of his preoccupation with making society work, he assumes a more critical attitude especially toward lawyers.

What invites the readers of Fielding is that under the pretence of giving them moral lessons as eighteenth-century English writers used to do, Fielding also presents a retribution for one's sins at the end of his novels. Fielding's general ethical outlook may be traced by means of a cause, and, effect examination of his characters; Blifil, a foil character of Jones, whose evil designs are frustrated in the end. In the Bible, especially the New Testament, there were many maxims Fielding was particularly fond of. The paper in *The Covent-Garden Journal*, of February 8, 1752, forms an important summary of Fielding's view on Christian charity. Judging from the retribution, or poetic justice shown in a significant passage of Fielding's didactic novels, one may support the presumption that the author follows Christian charity, that is, true love, in the case of fixing punishment for their injustice.